同窓会会報

第40号

昭和62年8月1日
発行所
茨城県東茨城郡
内原町鯉渕5965
鯉渕学園同窓会
〒319-03 TEL 0292-59-2511
振替口座 宇都宮7-1612番
印刷所
佐藤印刷株式会社

四十周年記念事業報告

鯉渕学園同窓会事務局

学園創立四十年を記念して、学園教育施設整備の支援、育林事業、鯉渕学園寮史の編纂を掲げ、取り組んでまいりました四十周年記念事業も、昭和六十二年四月末日をもって終結することにいたしました。事業の要でありました記念募金の応募状況並びに募金の使途につきましては、特別会計決算報告書および応募状況各表のとおりであります。

実施いたしました記念事業のうち育林事業については既報のとおりで、日立市小木津山の国有林三、三ヘクタールにスギ、ヒノキを植林し三年目を迎えております。学園教育施設整備の支援については、図書館両翼の木造建物二棟を既報の改修計画(会報39号P6)により改修、昨年十一月二十二日の学園創立記念式典並びに農業祭の席上出席した、和田会長はじめ本会役員に対し、学園として同窓会への感謝と修理なった二棟の披露がありました。修理費は暖房設備も含め、総額七百万円で全額を本会で負担いたしました。寮史の編纂につきましては、記念事業費から膨大な自治会と学友会の資料の整理費を支出しました。既に当初計画に沿って発行を終えていなければならない筈ですが、編集上の諸問題や事務局の都合等いろいろな事情で編集の業務がおくれ、現在、資料の整理を実施しつつ最終的な編集発行計画を検討しているところであります。

昭和五十九年七月に本事業を発足さ

会告

第十八回同窓会大会開催について

左記により第十八回同窓会大会を開催いたしますので、会員各位の御参加をお待ちいたします。

昭和六十二年七月二十日

鯉渕学園同窓会会長　和田文雄

会員各位

記

一、期日　昭和六十二年十一月十四日(土)
二、場所　鯉渕学園五番教室
三、日程　会場集合受付午後一時～一時三十分
　大会一時三十分～四時
　常任委員会四時～四時三十分
　懇親会四時三十分～六時三十分
四、参加申込み　十月三十日までに、はがき、又は電話にて宿泊の有無も加え、事務局(〇二九二―五九―二八一一広瀬)に申込んで下さい。
五、参加費　三千円(懇親会費を含む・宿泊は二千円加算)
六、その他

三、各科・コースの定員変更問題

前号で、農業の定員を九〇名に、生活栄養科を三〇名として学生募集を行う旨、お知らせしました直後、定員の変更には対外的な手続き、とりわけ、生活栄養科については、九月末日までに、厚生省当局の承認を要する旨の行政指導があり、急遽、変更を中止して、従来どおり、農業科八〇名、生活栄養科四〇名として、六二年度学生募集を実施致しました。

四、本科学生の編入

これまでも、他大学から本科編入が全く無かったわけではありませんが、昨年一〇月に、学則第十一条に、編入学の項を設け、本科に欠員がある時は、編入を認めることができるようにしました。早速、兵庫・大分・鹿児島の各県立農業大学校から四名の希望者があり、選考の上、園芸コース三年に、この四月から二名を受け入れました。実のところ、畜産コースと生活栄養科の欠員補充を期待したのですが、前者は希望者がなく、後者は希望者はありましたが、栄養士養成校の出身者でなければ編入できないことがわかり、種々便法を考えてみましたが、今回は断念せざるを得ませんでした。

五、基本問題検討委員会のその後

前号でお知らせしました本委員会は、昨年十一月末まで、断続的に会合を重ねましたが、残念ながら明確な結論を打出せないまま、事実上散会いたしました。私の分担した第一小委員会(教育問題)も、一般大学農学部や各県農業大学校等の教育と何処が違うのか、現在の学園教育の内容や体制の改善などについて取りまとめましたが、その後の進展はありません。

六、教職員の異動など

長年、学園教育にご尽力して来られた桜井助教授は、この三月末で定年ご退職、四月からは嘱託教授になられました。また米坂講師もご退職になり、農業経済学の金融部門は武田講師(五期生・この三月・農水省農業総合研究所退官)、食糧経済学は長谷川講師(昨秋、農水省退官)、農協事業論は小野講師(前・茨城県農協中央会参事)に、それぞれ分担依頼をしました。ところが、この六月、武田講師が急逝され、篠原講師(前・農水省農業研究センター研究室長)にお願いしました。武田さんは、後輩諸君に講義ができて嬉しいと、六月九日は張り切っておられたのに、その一週間後の十七日は、帰らぬ人になりました。まことに痛恨の窮みであり、謹んでご冥福をお祈りいたします。

経済学の横川講師(茨大農)は急に佐賀大学にご転勤、六月から丹野講師(茨大農・主任教授)にご後任をお願いしました。普及専攻科の育種学は有賀講師(前・茨農試場長)から小野講師(今春・農水省中国農試退官)に交代しました。

七、六三年度学生募集協力依頼

今年も何とぞよろしくお願い致します。愚痴になりますが、他大学に比べて、全く遜色のない内容、教職員の人一倍の頑張り、それなのに、文部省令によらないからと〝大学〟という名も用いられず、卒業後も何かと差別を受け、その上、昨今のように、よってたかって農業を悪者扱いにする風潮の中で、敏感な青年諸君が、農業志向に二の足を踏む心情も痛い程わかります。そうなんですけれども、そこを何とか説得下さって、一人でも多く、良い後輩諸君を送り込んで下さい。今年は、昨年よりもっと早く学生募集に取組みたいと思います。お知り合いの方々には勿論、お近くの高校、農協、役場、普及所等々、積極的にご勧誘下さるよう、お願い致します。

末筆になりましたが、酷暑のみぎり、一そうのご大切をお祈り申上ます。(六二・七・一)。

昭和六十三年度本科学生募集要項

一、募集人員

本科(三年制)

①農　業　科(男・女とも)八十名

②生活栄養科(女子のみ)四十名

二、出願手続

出願者は下記書類に選考料を添えて鯉渕学園教務部に提出すること。

但し沖縄県在住の出願者は沖縄県宜野座村字宜野座一六六〇、沖縄県農業協同組合中央会農業教育研修所教育部に提出すること。

①入学願書

②身上調書

③健康診断書

④課題による作文　}本学園所定の用紙を使用のこと。

⑤高等学校の調査書〔特に各科目の評定、学習成績概評、成績段階別人数、所属する科(学年)の総学生数、行動及び性格の記録等を明確に記入すること〕

⑥現住所の市町村長または農業協同組合長などにより、家庭の事情や本人の将来の希望などを含めて推薦を得たものはその推薦書。

⑦選考料　一〇、〇〇〇円(現金または為替にして送金のこと。)

三、願書受付期間

昭和六十二年十一月二十一日(土)より昭和六十三年二月二十日(土)(当日の消

印のあるものは有効)までの期間。

四、選考・発表

願書の受付締切後、書類について選考し、その結果を二月二十七日(土)に発表する。

五、入学手続

合格通知を受けたものは、十日以内に所定の入学手続きを完了すること。

六、入学式

昭和六十三年四月十五日(金)

七、諸経費

①納付金(下表)

②食　費

月額　二〇、〇〇〇円程度

③研究旅行積立金

月額　一、五〇〇円

八、奨学金貸与制度

学費支弁困難なものは、下記の奨学金を利用することができる。

鯉渕学園奨学金

月額　一〇、〇〇〇円

全国農協中央会農協職員養成奨学金

月額　一五、〇〇〇円

備　考

①いったん提出した入学関係書類や既納の授業料その他の納付金は、いかなる理由があっても返還しない。

②学園要覧・願書など所定用紙の請求は、五〇〇円(切手でもよい)を封入して、鯉渕学園教務部または農民教育協会に問い合わせること。

財団法人　農民教育協会

東京都北区西ヶ原一丁目二六番三号
郵便番号　一一四
電話　〇三-九一〇-七〇二七
鯉渕学園
茨城県東茨城郡内原町鯉渕五九六五
郵便番号　三一九-〇三
電話　〇二九二-五九-二八一一

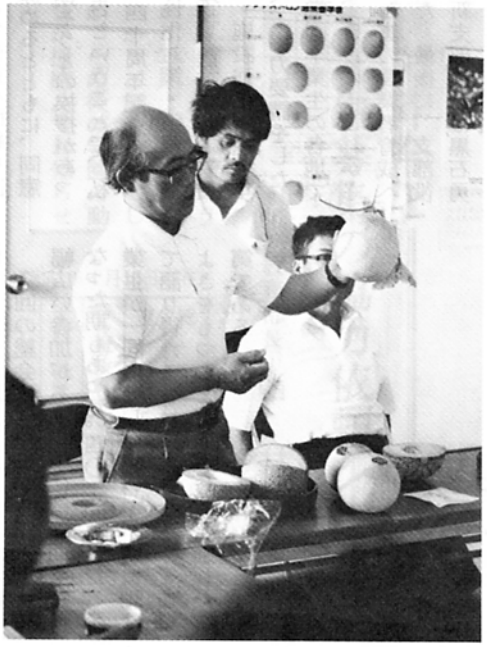
納付金(62年度額)

(単位：円)

区　分	入学手続時	前　期	後　期	合　計
入学金	150,000			150,000
授業料		115,000	115,000	230,000
教材費		7,500	7,500	15,000
施設維持費		50,000		50,000
図書整備費		5,000		5,000
合　計	150,000	177,500	122,500	450,000

メロンの産地づくりに活躍する浅田昌男氏

—14期生—



一、浅田昌男氏のプロフィル

浅田さんは北海道虻田郡狩田町曽我の生まれ(昭七)。長じて八ヶ岳経営伝習中央農場(昭二十九)、さらに鯉渕学園(昭三十四年)に学び、いわば筋金入りの農業・農村の指導者である。

氏は、学園卒業と同時に茨城県鹿島郡旭村農協に勤め、営農指導の第一線に立ち、赤ノッポ・火山灰という乾燥し易いやせた土地の畑作改善に挑戦された。当時の畑作は麦・甘しょを中心とした普通作であり、村もそれ程裕福ではなかった。一方、日本農業は、高度経済成長の中で兼業化を進め、また、農基法の制定と農業構造改善事業の進展とともに、新しい農業への脱皮と胎動を始めていた。若き営農指導員浅田氏の双肩には、こうした大きな問題がズシンとのしかかっていたのである。

氏は、三十九年に、土地の古老竹内音次郎氏(当時七十才)と相計り、プリンスメロンを試験的に導入し、その定着と拡大を期した。翌四十年に、まず、七名からなる「造谷特産グループ」を、そして、四十一年には「旭村農協プリンスメロン部会」・会員三十五名を誕生させ、苦労とメロン産地形成への第一歩を踏み出すことになった。その後、会員も増加の一途をたどり、六十年には四百三十一名を数え、年収二十八億円(三百十ヘクタール)の産地を作りあげ、名実ともに県下第一となり、ついに、六十一年に茨城県朝日農業賞の栄に浴した。

この間の苦労について氏は次のように語る。「メロン栽培ははじめてのこと、夜もおちおち寝ておれなかった」し、「市場の声価や要求が気になり、メロ

ンと一緒に市場に出向き、市場関係者の意見をよく聞き、来年の改善に生かした」という。また、「寝るのは何時もトラックの中であり、時には見廻りのハウスの中だったりした」という。こうした氏の骨身を惜しまぬ熱意と努力が生産者のそれと合したからこそ、農業賞として結実したのである。

私達が訪れた時、丁度、メロン研究会の人達が、新しい品種選択のための試食会を開いていた。その席での氏の説明は、簡にして要を得ており、さすがはキャリア二十五年のベテラン営農指導員という感を十分味わせてくれた。また、会員の「課長……」「課長……」という声には親しみが込められ、両者のコミュニケーションのよさもうかがえた。これも氏の人柄のなさしめるところか。氏は、現在、販売を担当する課長の要職にあり、方々の市場からの対応に席を温める暇もない。そのせいか、オツムに苦労のあとがしのばれる。

家庭には、静子夫人(旧姓内藤・元学園職員)と二人の娘さんがおられ、氏の活力の源泉となっている。

二、旭村メロン作の特徴

旭農協のメロン部会は、会員四百三十一名、部落毎の二十三支部からなる。また、青年部を中心とした会員五十名の研究会が組織され、新しい品種・作型や品質の改良研究が行われている。栽培面積は約三百五十ヘクタール(昭六十一)で、アンデス六十五%、アムス二十五%、プリンス・パパイア十%の作付割合である。メロンの跡作には、抑制のトマトとアールスメロンが栽培され、また、連作障害回避のため、スイートコーンや禾本科牧草のスダックス等が緑肥作物として作付けられている。年出荷額はメロン二十八億円、トマト五億円で、村の農業粗産額の主軸をなしている。一戸当たりの農業所得は七百五十万円であり、県平均の農家所得の五百三十四万円(昭五十九)を遙かに上廻っている。

関東産のメロンは、九州産と東北産の間に出荷されるが、旭のメロンはその走りである。時には九州産と重なることもあるが、東京をはじめ各地の市場で声価が高く、引き合いが多い。その主たる要因は、一元的な技術指導と厳格な共選と共販(八十五%)、土づくりにあるといえる。それを顕示するかのように、五十九年に建設された中央集荷場と堆肥センターがそびえ、出荷期にはさながら戦場と化している。

自動車の車窓からみる家々も、どこか豊かさを感じさせている。

三、浅田氏の今後の抱負

浅田氏は、今や旭村の人である。氏は述懐していう。確かに、村はメロンによって豊かになった。しかし、そのために忘れられていたことがある。それは「人づくり」だ。今後は、それに向けて、と奥深い抱負をもっている。「メロンづくり」、「土づくり」そして「人づくり」を通じて、これからも旭のメロンは、関東メロンの王者としての地位を守り、発展し続けるであろう。浅田氏の今後の一層のご活躍を祈念しつつ紹介を終りたい。

(関正治)

(後記)

今後、このような同窓生の活躍を紹介していきたいので、各地の事例を本部事務局までお知らせ下さい。(事務局)

新潟県支部総会に出席して

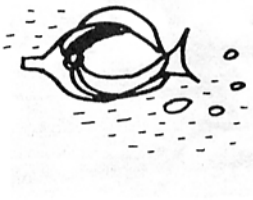
関　正　治

去る七月四日、第五回鯉渕学園新潟県支部同窓会の総会が新潟市鳥屋潟「ホテル湖畔」で、県下から四十三名、宮島三男先生と私の総勢四十五名を集めて、盛大に開かれた。

総会は、定刻の五時過ぎに始まり、冒頭、全員で鯉渕学園寮歌を斉唱、続いて、大垣芳美支部長(三期)から、県下卒業生の動向報告と今後益々団結を固め、相互の親睦を深めるとともに、同窓会の一層の発展を期そうとの挨拶があった。次いで本部報告ということで、私から、同窓会活動(四十周年記念事業・第一七回大会・活性化対策・学生募集協力等)、学園の現状と展望(各種委員会活動・学生応募・施設強化・六七年以降対策等)を述べ、協力要請をした。宮島先生からは、学園卒業生の各地での活躍ぶりを紹介、さらに、これからの学園の位置づけと真の農業者育成への期待を述べられた。最後に、支部役員の改選があり、新支部長には黒石勇蔵氏(五期)、副支部長には田辺扶裕子氏(一三期)が、また、上越、中越、下越、新潟の四地区に各三～五名の幹事が選出され、ほぼ一時間で総会を終了した。

懇親会は黒石新支部長の挨拶と一期の水戸部幸一氏の乾杯で始まり十時近くまで自己紹介や懇談で親交を深め、さらに、宮島先生を囲む二次会も各期混じって十二時近くまで続いた。

今回の総会は、一期から三九期まで幅広い参加があり、中には同期生会になった期もあった。四〇年間にわたる卒業生が一同に会し、想いを学園に馳せて語り得たことは、大きな意味と力づよさをもつことを痛感し、帰園した次第である。



祝迫親志氏（六期生）農学博士に

今年二月、六期生祝迫親志さんに対して、東京農業大学教授会は万場一致で、農学博士の学位を授与することを決定した。長い年月にわたって、昼夜を分たず研鑽を続けられた祝迫さんの頑張りに、改めて敬意を表する。

祝迫さんは、鹿児島県出身、昭和二三年四月に入学、同二六年三月卒業、直ちに東京農工大学農学部に勤務、翌年には茨城県農業試験場病理昆虫部に奉職、爾来三十余年、幾多の試験研究と取組み、数々の業績を挙げられて、現在は同部部長の要職にある。

なかでも、コンニャク根腐病に関する研究は、今回の学位請求論文で、研究者の間でも高く評価されている。論文は三百余頁にも及ぶが、その骨子は、これまで、コンニャクの産地に大きな被害を与えながら、原因不明で、栽培農家を悩ませていたコンニャク根腐病は、その原因が糸状菌の一種(Pythium aristosporum Vanterpool)であることを突き止め、さらに本病の発生生態を解明して防除対策を確立したものである。

茲に広く同窓の皆さんに報じてその慶びを分ちたい。（西村　典夫）

六期生会のお知らせ

皆さん、お元気ですか。卒業してもう三十六年たちました。そこで、私たち在茨の者が中心になって、同期会を計画いたしました。なつかしい古巣に集って、久しぶりに、大いに語り、大いに飲もうではありませんか。全員、ご賛成の上、万障繰合わせて、必ず、ご出席下さい。

日時　昭和六十二年一〇月一〇日(土)～一一日(日)

場所　鯉渕学園同窓会館

※なお詳細は後日、ご通知申しあげます（栗田悦二・立原徳治・祝迫親志・石塚弘造・稲見幸二）

新卒業生諸君に贈る

西村　典夫

一、卒業おめでとう

小学校から数えれば、本科生で一五年、専攻科生にとっては一六年もの間、人生八〇年といわれる今日でも決して短いものとは言えない学校生活である。それぞれの時代に対する追憶は尽きぬものであろうが、取り分け、青春を燃やした鯉渕学園での生活は、これからの諸君の生涯において、幾度となく回顧の対象になるであろう。

郷里では、ご両親が今日あるを誰よりも待ちかつ喜んでおられよう。私にもまだ修業中の息子がおるから、遠く茨城に諸君を送って大学教育を受けさせるために、どんなにご苦労されたことか、想像に難くない。ご両親に面と向かって〝長いこと有難うございました。〟が照れ臭い諸君でも、胸中深く感謝の念を秘めているに違いない。

二、学園は卒業しても、学問に卒業はない

蛍雪の功なって、諸君の手にする卒業証書は〝所定の課程を習得した〟証明と併せて〝尚一層の精進を期望する。〟と記してある。一般に、日本における卒業式は、文字どうり、業を卒えた、と受け止められるが、アメリカにおける大学の学位授与式＝卒業式は、コメンスメント(Commencement)といって、開始する　の意味が含まれている。わが鯉渕学園では、それに肖(アヤカ)ったわけではないが、その精神において相通ずるものを感じている。正(マサ)に、卒業は〝終り〟ではなく、これから〝始める〟と解したい。

諸君の在学中、余り細(コマ)かいことは言わなかったから、一部では不満もあったであろう。講義も難解で興味の持てなかった諸君もおったに違いない。しかし何時の日にか、意のあるところを斟酌(シンシャク)して貰えれば幸いである。

三、読書の勧め

何時の卒業式であったか、農民教育協会・初代会長・東畑精一先生(昭和二三年～五八年の間・会長)は、卒業生諸君に、一日一頁でも良いから読書を続け給えと諭されたことがあった。在学中は何かと強制的に読まされることも多かったであろうが、これからは、諸君自身の判断に委ねられる。高度情報化社会の到来というのに、読書を勧めるなど、訝(イブカ)る向きもあろうが、だからこそ、一層の読書が大切ではないかと思っている。私は、思うところ

あって、諸君の卒業に際して、次の一著を紹介したい。

四、後世への最大遺物

岩波書店から出版されている一〇〇頁足らずの小冊子(文庫本)である。著者・内村鑑三(一八六一～一九三〇)は、明治大正の時代の卓越した宗教家・評論家で、初代の鯉渕学園長小出満二先生の師でもある。私は、小出先生(昭和二一年～三〇年の間、学園長)や、藤岡孟彦先生(昭和二三年～三二年の間、植物病理学の教授、詩人高村光太郎の実弟)を囲み、毎年一〇名程の諸君と読書会を開き、そのテキストとして、幾回となく読み、その都度、強い感銘を受けた。近年、岩波クラシックとして、四六判が出ており、値段は文庫本一五〇円(第四〇刷、昭和五八年)に対し、九〇〇円(第一刷、昭和五九年)と高いが、難解な文字にはふりがながつけられて読み易くなった。鈴木俊郎氏は、文末の解説の中で、その要旨を次のように述べている。「われわれが五十年の生命を託したこの美しい地球、この美しい国、このわれわれを育ててくれた山や河、われわれはこれに何も遺さずに死んでしまいたくない。何かこの世に記念物を遺して逝きたい。それならばわれわれは何をこの世に遺して逝こうか。金か、事業か、思想か、これいずれも遺すに価値あるものである。しかしこれは何人にも遺すことのできるものではない。またこれは本当の最大の遺物ではない。それならば何人にも遺すことのできる本当の最大遺物は何であるか。それは勇ましい高尚なる生涯である。」

五、むすび

勇ましい高尚なる生涯をといわれると、一瞬たじろぐやも知れない。けれども、私流に言い換えれば、片意地を張らず、誠実で、少々のことではへこたれない人生を　と言ったところか。

今別れても何時か見ん、幾年春は巡るとも、どうか、健康で頑張って欲しい。

(昭和六二年一月二三日)

〃この文章は「萌芽」に掲載予定のものでしたが、今年萌芽の発行ができなくなりましたので、時期的に少々異和感があるかと思われますが、今回同窓会報に掲載させていただきます。〃

新井正雄先生の古稀を祝って
みんなで集まり励まし合おう

農産製造特研、および農村生活科の新井先生門下の善男善女の皆さん！お元気ですか。

在学中、特別お世話になり、かつ御迷惑をおかけして甘えさせて頂いた慈父のような新井正雄先生が優雅な奥様と四人のお子様、七人のお孫さんに囲まれて、古稀を迎えられました。

そこで、この機会に先生の古稀をお祝いし、今後のご多幸をお祈りして在学中のせめてもの罪ほろぼしをしようと、昨春学園に集りました四期の特研生で、左記のような企てをいたしました。大方の御賛同を得られれば幸いと存じます。

記

一、呼びかけの範囲

学園創設以来の農産製造特研、農村生活科卒業生で新井先生の門下生と自負する者および有志。

二、お祝いと近況報告のハガキ

〒309～17　茨城県西茨城郡友部町鯉渕六五二〇―二四　新井正雄先生　あてにお祝いと近況報告のハガキを早目に！できれば祝賀会にコピーの全集を配りたいので、文面に卒業期、住所、氏名(旧姓)も書く。明日と云わず今日書こう。

三、記念品贈呈

一口二千円以上いくらでも自由、九月末日まで、送り先　常陽銀行友部支店、通帳番号、店番、０７８、口座番号、６２７４１２７　古稀記念会、代表　新井正雄　(通帳に送り主の名前が残り記念になる。)

四、新井先生を励ます会開催

期日　十一月十五日(日)
　　十時～十四時
場所　学園
会費　五千円
※参加希望者は九月末日までに事務局あて
五、事務局　鯉渕学園教務部
六、発起人　四期農産製造特研
伊福　靖　小泉真吉　中村　健
上田　忠　中村剛二　坂本義博

同窓会会員名簿の購入および同窓会費納入のお願い

先の会報(三十九号)で発行案内いたしました同窓会会員名簿がまだ余っておりますので、希望者は学園事務局(〇二九二―五九―二八一一広瀬)までご連絡下されば送りいたします。頒価　送料共二、五〇〇円です。

尚、本会の財政は会員皆様の会費によって運営されております。今後、会の運営を支え、盛り上げていく上で会員皆様の御理解をいただき、昭和六十一、六十二年度会費、三、〇〇〇円を納入下さるようお願い申し上げます。

会費等の送金は「内原町農協南部支所口座番号２４０２７００鯉渕学園同窓会代表・高橋隆三」を御利用下さい。